

## 環境経営学会メールマガジン（特別号）

（2018年11月5日）

去る10月26日、環境経営学会の西澤潤一名誉会長が10月21日に逝去されたと、東北大学から発表されました。享年92歳でした。

皆様ご存知の通り、先生は電子工学の分野で数々の独創的な秘術を生み出し、「ミスター半導体」、「光通信の父」などと呼ばれ、日本学士院賞、文化功労者、文化勲章などの栄誉に輝き、東北大学総長、岩手県立大学初代学長、首都大学東京初代学長も歴任されました。

先生は、環境経営学会の創立者で、初代会長として設立当初の学会の基礎を固められ、その後10数年間にわたり名誉会長としてご指導をいただきました。

惜しみても余りあるご逝去です。心からお悔やみ申し上げます。

先生のこれまでの数々のご指導とご貢献に対する、学会有志の皆様の感謝と追悼の言葉を掲載し、「メルマガ特別号」としてお届けします。

メルマガ編集委員会

### ○ 追悼の辞

会長 後藤 敏彦

当学会の設立者であり名誉会長の西澤潤一先生がご逝去されました。先生のご功績は知らない人はいませんのでここで繰り返すまでもありません。当学会の初代会長として基礎を固めていただき環境経営格付けの基礎も固めていただきました。

3.11 東日本大震災の後、当学会では緊急提言を発信しました。その中で北海道から九州までの直流送電線の設置も提案しています。これは先生の東アジア送電網構想の一部をいただいたものです。

先生の構想は、今日本抜きで進みつつあることを考えますと、ご先見の明にあらためて驚く次第です。

心よりご冥福をお祈りいたします。

### ○ 追悼文

特別顧問・東京大学名誉教授  
山本 良一

西澤潤一先生には環境経営学会創立の頃から親しくご指導をいただきました。個人的には2004年の北京で開催された国際会議で、3000人の出席者から選ばれた10人のうちの日本人2人（西澤先生と小生）として江沢民主席と会見したことが忘れられません。1

人1～2分間、江主席と自由に会話して良いということでしたが、西澤先生はそれより長くお話されておられました。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

○ 西澤 潤一先生追悼文

理事 青木 修三

20世紀最後の年の秋、2000年10月、当時日本銀行は退職してはいたが、なお金融機関にいた私に1通の手紙が届いた。「環境経営学会設立総会へのお誘い」であった。呼びかけ人には、向坊先生、西澤先生、山本先生はじめ錚々たる先生方がおられたが、設立総会后直ちに入会した私が最初にお仕えした環境経営学会の会長が、英国紳士のような西澤先生であった。

その後、学会の運営に携わることになり、難しい課題に直面すると、私は西澤先生の芝のオフィスにお邪魔し、お話を伺うことが何回かあった。「超電導」等で世界的にも名声の高い先生であったが、その都度、柔和だが、凜とした声で「信念を持って進みなさい」と励ましてくださることが多かった。オフィスから、街頭に出ると大変清々しい気持ちになった。爾来20年近く、金融界に身を置きつつも、環境や倫理、あるいはエネルギーの世界で、多くの経験をさせていただくことが出来た。何の恩返しも出来ないままに、先生のご訃報に接することとなった。慚愧の念に耐えない。

心からの感謝と御礼の気持ちをもって、切に先生のご冥福をお祈り申し上げたい。

○ 追悼

理事 木俣 信行

西澤潤一先生は、元々仙台の小学校から大学に至るまでの先輩であり同級生の兄上であることもあり存じ上げておりましたが、環境経営学会創立以来、様々な場面でご薫陶をいただいて参りました。取分け、先生が提唱されておられた超高压直流送電によるグローバル・ネットワークは、地球温暖化問題の解法と同時に、エネルギーにおける世界の協調を促し平和に貢献するもので、個人的にも非常に大きな感銘を受け、その実現を心から期待しております。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

○ 西澤潤一先生を偲んで

理事 花田 眞理子

西澤潤一先生の訃報に接し、大きな喪失感に襲われております。  
ここに心より哀悼の意を表し、ご遺族の皆様にお悔やみを申し上げます。

私が先生の警咳に接する機会をいただいたのは、東日本大震災が発生した2011年の、環境経営学会研究報告大会でのことでした。控え室での先生は、知の巨人といういかめしさは微塵もなく、とてもお優しくお話し下さったことを思い出します。ちょうど出版されたばかりのご著書を頂戴できた学会員の私たちは、本当に幸せでした。

ご講演での先生のお言葉は、日本の科学のあり方に警鐘を鳴らすとても厳しいものでしたが、同時に不思議にあたたかく、励ましていただいたようにも感じられました。

しかし気候変動の深刻化にブレーキをかけることができている現在、私たちが先生から戴いた宿題の重さを痛切に感じるとともに、環境経営学会として、もっと先生にご指導いただきたかったと無念でなりません。

先生のお言葉をあらためてかみしめ、学会として社会に発信していくことが私たちの使命であるとの決意を強くいたしました。

先生、本当に有難うございました。

## ○ 巨星墜つ～独創とは独り創りを練ること～

副会長 村井 秀樹

西澤先生のことを初めて知ったのは、今から33年前。1985年3月4日に放映されたNHK特集「光通信に賭けた男～独創の科学者・西澤潤一～」である。当時、私は大学3年生。将来大学院に進み会計学の研究者になるか、それとも一般企業に就職するかで思い悩んでいた頃である。この番組を見て、私は西澤先生に憧れといった甘いものではなく、震え上がるほどの恐怖心しか持てなかった。それは、東北大学半導体研究所は西澤道場、別名「鬼道場」と呼ばれていた。西澤三原則を掲げ、世界の誰よりも早く、独創的なものを発表しなければならぬと、若い大学院生が西澤先生にぐうの音も出ないほど叱責されていたからである。自分自身、研究職に進むべきか躊躇するほどの衝撃を受けた。

この番組をきっかけに、西澤先生の御高著に興味を持ち、『独創は戦いにあり』（プレジデント社）、『愚直一徹』（日本経済新聞社）、『私のロマンと科学』（中公新書）等々、ほぼ全てを読破した。西澤先生は「教育とは火をつけること」「学生には愛情を持って教える」「日本の科学技術を世界一に」を繰り返して説かれた。まさに、国士である。

当時、西澤先生は58歳。現在の私とほぼ同じ年齢である。33年前の西澤先生の叱責の光景を思い出しながら、今でも下記のようなことを自問自答している。

学生の育成のため、厳しくかつ愛情に溢れた指導をしているのか？

学生の魂に火をつけるような講義をしているのか？

独創的な研究を世界に先駆けて発表しているのか？

国、社会、地域、家族を心から愛しているのか？

ご冥福をお祈りしたいと思う。

○ 西澤潤一先生を偲んで

理事 山本 勇

親しくお話しさせていただく機会は多くありませんでしたが、ご講演会などでお話を拝聴することを楽しみに致しておりました。色々なお話の中で「極東アジア大陸から日本へ電力を供給することの実現性」をお聞きしたときは、独創的で壮大な構想に全く敬服いたしましたことが忘れられません。ご冥福をお祈りいたします。有難うございました。

○ 西澤先生を偲ぶ

前理事・事務局長 坂水 久之

私は先生が向坊先生や宇沢先生とご相談され、環境経営学会を立ち上げようと言われた時の教育者としての思いを何度も、直接に伺ったことがありました。

「日本の経営者には素晴らしい人がたくさんおられる。その方々に今人類や地球が置かれている状況を理解していただき、素晴らしい経営をしていただきたいんだよ」というように仰っておられました。それがSMFの発足につながったのでしょうか。

本当に指導的な役割を果たせる人材の育成を切望しておられました。

特にエネルギーの問題については温暖化との関係で化石燃料に頼る発電の将来を心配されながらも、原子力発電については「非常にコントロールが難しく、日本で安全に運転することは技術的にも、経済的にも難しいだろう」というお考えでした。

電気事業連合会の会長を務められているときには自民党や経団連のすすめるエネルギー政策についてははっきりとノーを突き付けたことで退任を迫られたこともありました。

「制御できない科学の扉を開かないこと」「倫理に反する科学の扉を開かないこと」ということばで何度もお話になっておられました。

福島事故が起こった時に「それ見たことか！！」と自説の正しかったことを主張されることもなく「私の力が足りなかった！！ あの場所では地震も、津波も想定内であった。せめて高台に3台の移動電源車を持っていればメルトダウンだけは防げただろうに！！」と涙を流しておられました。倫理観を持った科学者の言葉でした。

日本で一人だけエジソンメダルをお持ちの西澤先生が不遇の晩年を過ごされたことを弟子のひとりとして本当に申し訳ないと思います。20年前にノーベル賞のお話が出た時に当時の文部省が反対でした。なんと情けないことでしょうか。

まさに凜として孤高を保ち、武士道を貫かれた先生。

天上から私たちをお導きください。心からの感謝と共にご冥福をお祈りいたします。

○ 名誉会長西澤潤一先生への感謝の言葉

理事・事務局長 中村 晴永

西澤潤一先生は、学会の会長に就任される直前の2000年2月に、地球環境の破壊が進行する中であって、如何にしてこれに歯止めをかけるか、との根源的な課題に対峙して、ご著書『人類は80年で滅亡する～CO2地獄からの脱出～』（東洋経済新報社2000年2月）を、上野勲黄先生と共同で上梓されました。その中で、環境系学問を融合して、理想的な環境創造社会を構築すべきとされ、科学技術に根ざした独創的、具体的な課題解決の糸口を提唱されました。

そして2000年10月には、本書の提唱する理想に一步でも近づく目的を秘められて、環境経営学会を設立されたと思います。その理想の姿が、学会の設立趣旨や定款に明記されております。先生は環境経営学会の初代会長として学会の基礎固めに尽力されました。

会長ご退任後は、名誉会長として、学会の研究報告大会に何度となく足を運ばれ、ご講演をされる等、指導していただきました。小生が始めてその警咳に接したのは名誉会長ご就任の直後、2004年5月の第4回研究報告大会における基調講演でした。学会に入会したばかりの小生にとっては、環境経営のイロハを勉強中であつたこともあり、このご講演により、大いなる刺激を受けたことを覚えております。

その後10数年、事務局に在籍する中で、西澤先生の数々のご功績や主張、環境経営との関わりを知るに及び、先生の当学会に対する並々ならぬ愛情の深さを感じておりました。この10数年間、一度も欠かすことなく年会費をお送りいただき、2018年度も6月に振込まれたところでした。ところが、毎月配信している「環境経営学会メルマガ」が、配信不能で戻ってきたのは確か2018年9月号でした。何か異変があつたのではないかと懸念しておりましたが、新聞で10月21日にご逝去されたとの報に接し、驚愕しました。「メルマガ」への巻頭言をお願いすることも考えていただけに残念でなりません。

先生の提唱された理想の姿の実現に向け、我々としてもたゆまず精進し、前進してまいることをお誓いするとともに、長きにわたるご指導ご鞭撻に感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

\*\*\*\*\*  
日本学術会議協力学術研究団体  
認定特定非営利活動法人 環境経営学会  
メルマガ編集委員会（座長：事務局長 中村晴永）  
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-4-10-5F  
TEL：03-6272-6413 FAX：03-6272-6414  
[smf@smf.gr.jp](mailto:smf@smf.gr.jp) <http://www.smf.gr.jp>  
\*\*\*\*\*